

暗褐色の子犬

ステイブ・クレイン作

牧草 泉

一人の子供が街角にたずんでいました。彼は板塀にもたれて一方の肩を前後に揺すりながら、退屈げに砂利を蹴っていました。

太陽は道路の砂利にさんさんと照りつけていました。気まぐれな夏の風は黄色い砂塵を巻き上げていました。砂塵は一塊になって道の流れるように這っていききました。トラックが砂塵の中をがたがたと音を立てて走って行きました。子供はぼんやりと周囲を眺めていました。

すると、一匹の小さな暗褐色の子犬が小走りにやってきました。子犬の首には短い紐がついていました。子犬は時々躓きながら歩道の端を歩いて来ました。子犬は子供の反対側の歩道に立ち止まりました。子供と子犬はふと顔を見合わせました。

子犬はしばらくもじもじしていましたが、やがて尻尾を振りながら子供に近づきました。子供は手を差し出して、おいで、おいでをしました。子犬ははにかんだような素振

りをしながら子供に近づきました。やがて二人はお互いになでてやったり尻尾を振ったりして仲良くなりました。

子供が声を掛けると、子犬は盛んにうれしそうな仕草をしました。子犬がはしやぎすぎたのでしょうか、子供は転びそうになりました。子供はあわてて手を振り上げると子犬の頭を叩きました。その仕打ちに驚いた子犬はとても恐ろしく感じたようでした。子犬はしょんぼりして子供の足元に座り込んでしまいました。子供は、子犬を叱りつけながら何度も叩きました。子犬は仰向けにひっくり返ると、足を上にあげて白い腹を見せました。そうして耳と目で子供に哀願するようなしぐさを見せました。

子犬が仰向けになって手足をつんと上に向けた格好はともかわいく見えました。子供は面白がって繰り返して子犬を叩きました。でも子犬にとってはとても厳しい罰だったのです。ですから、子犬は、自分はきっとひどい罪を犯したんだと思つたに違いありません。子犬は体をくねらせて後悔していることを動作で示しました。そうして、あらゆる方法で子供に対してごめんなさいという意思表示をしたのでした。子犬は子供に訴え続け、哀願し続けました。

子供はようやく遊びに飽きが来て、家に帰ろうとしました。子犬はそのときもまだ哀願しているような格好をしていました。子犬はまだひっくり返ったままでした。そうし

て子供が立ち去るのを見ていました。子供が歩き出すと、ようやく子犬は起き上がり、その後を追っていききました。子供はぶらぶらと家の方に歩いていきました。子供が立ち止まって振り返ると、あの子犬が目に入ってきました。子犬はさりげなく歩いている振りをして、子供の後を追って来ていたのでした。子供はそばに落ちていた小さな棒切れで子犬を追い払いました。子犬は腹ばいになって哀願しました。結局子供は根負けして子犬を追い払うことをやめました。そうして家に向かって歩き出しました。すると子犬はまた起き上がって子供を追って行きました。

子供は家に帰る途中、何度も振り返って、あとを追ってついて来る子犬を棒で追い払いました。そうして子供なりに、「お前は遊ぶとき以外は、何の値打ちもない無用の犬だから追い払うんだ」と言うような態度をとったのです。

子犬は、「どうせ犬なんて、つまらない動物ですよ」と言うような素振りをして大仰に謝りました。でも、子犬はまた少し距離を置いて子供についていきました。子犬はとても罪深い態度をしていました。子犬はあたかも暗殺者でもあるかのようにおどおどしていました。

子供が玄関に着くと、子犬は当然そつと歩みを止めました。子犬は再び子供と向きあうと、とても恥ずかしそうな素振りをしました。子供は子犬の動作に気をとられて犬の

首にかかっている紐を忘れてしまっていました。子供はその紐に引っかかって転んでしまいました。子供は階段に座るとまた子犬と向かい合いました。そのとき、子犬がまた子供の関心を買おうとしました。子犬はがむしやりに跳ね回りました。

それを見て子供は急に子犬がかわいくなりました。子供はすぐに子犬に近寄って紐を掴みました。子供は子犬をホールに引きずり込みました。そうしてそこから長い階段を上って行って薄暗い部屋に入りました。

子犬は慌てふためいていましたが反面嬉しそうでした。子供は夢中になって子犬を引っ張るので足が速くなりました。子犬はあわてて歩く速さを子供に合わせようとしませんでした。でも、子犬はとても小さく体が柔軟で上手に歩いたのでびっこを引くようなことはありませんでした。

子犬は自分が全く知らないところに引っ張られていくような思いがしたのでした。子犬の目は恐怖で一杯開いていました。子犬は狂つたように首をうちぶり始めました。そうして足を踏ん張って抵抗しました。子供は一生懸命に子犬を引っ張ろうとしました。子供と子犬は階段で争いました。でも、子供はお構いなしに必死で引っ張り続けました。子犬はとても小さかったので子供には敵いませんでした。子供は子犬を家の玄関に引っ張って行きました。そうしてついに子犬を家の中に引きずり込むことに成功しました。

家の中はがらんとして誰もいませんでした。子供は床にしゃがみこんで子犬にいくつかの提案をしました。子犬はこの提案をすぐに受け入れました。子犬と子供はたちまち固い友情で結ばれた仲間になりました。

ところが、子供の家族が家に戻ってくると、子犬のことで言い争いが生じました。家族の者は子犬についているいろとあら捜しをして非難し、罵りました。家族の誰もが子犬を軽蔑の眼差しで見たので、子犬はとても恥ずかしい思いをして、しおれた草のようにしょんぼりしていました。一方、子供はきつとなって部屋の真ん中に行くと、大声で子犬の弁護をしました。

お父さんが仕事から戻ってきました。子供は子犬の首をしつかりと抱いていました。両親はなぜあのように子犬が吠えているのかと不審に思いました。お茶目な子供は子犬を家族の一員にしてほしいと何度も言い続けました。

やがて家族会が開かれました。子犬の運命はこの会議にかかっています。しかし子犬はそんなことはちっともお構いなしに、子供の服の端に噛み付いて遊んでいました。会議はすぐに終わりました。

お父さんはその夜はとくに感情が高ぶっていました。こんな子犬が家族の一員になったら、みんなを驚かせたり怒らせたりするに違いないと思ったのです。お父さんはそれなり、知らない素振りをしたり、それらの家具などの間に隠れたりしました。

子犬は、人々から箒や棒切れや石炭の破片を投げつけられるような悪戯をわざとすることもありました。それでも、子犬が傷を負ったりかすり傷を負うことはほとんどなくなりました。

人々も仲間であるその子供がいるときは子犬に対して手荒なことはしませんでした。子犬がいじめられていると、子供は突然泣き出すのでした。そうしていったん泣き出すと性格は荒々しくなつてすごく激情的になります。

こうして、子犬にはいつも助けてくれる人がいるということが次第に人々に知られていったのでした。

でも子供がいつも子犬の傍にいるわけではありません。夜になって子供が眠っているとき、子犬は部屋の片隅で目を覚まして、野性に目覚めて悲しげに吠えることがありました。それはとても孤独で悲しい歌のようでした。子犬はレンガ造りの建物のなかで体を震わせて吠え続けました。こんなとき、いつもこの子犬の歌い手は台所から追い出されて棒切れで叩かれるのでした。でも子犬には叩かれる理由は全くありませんでした。そうです、子供は訳もなく叩いたのです。でも、子犬は悪いことをしたんだと自分で思つて、いつもこれらの仕置きを素直に受けたのでした。

が不安だったのです。しかしお父さんは、子犬を家族の一員として迎えようと決心しました。

子供はそつと涙を流しながら、子犬を部屋の片隅に連れて行って頭をなでてうれしそうでした。一方、お父さんは子犬を飼うことに強く反対しているお母さんをなだめました。

結局いろいろありましたが、子犬は家族の一員になることが認められました。子犬と子供はいつも一緒に過ごしました。子犬が一人で過ごすのは子供が眠っているときだけでした。

子供は子犬の保護者であり友達でもありました。子犬が他の人から蹴られたり、物を投げつけられたりしたときは、大声をあげて激しく抗議しました。子供は子犬をかばおうと、涙を顔一杯にし、大声を出して両手を広げて走りまわつて子犬をかばいました。

あるとき、お父さんが手にしていたソースパンで子犬を殴ったことがあります。それは子犬が一見して不埒なことをしたことと叱られたためでした。その後は、家族は子犬に物を投げつけるようなことはしなくなりました。子犬もしたたかになつて、棒を投げつけられても足蹴にされても、それを上手に避けることができるようになりました。小さな部屋にはストーブやドレッサーや椅子が置かれていました。子犬は巧みな作戦能力を学んで、言い逃れをした

子犬はとても素直だったので、子供に歯向かったり、復讐しようなどと思ったことはありませんでした。子犬は素直に子供の言うことを聞き入れました。子供から叱りつけられたあとは、子犬はいつも小さな赤い舌で子供の手を愛情こめて舐めるのでした。

子供は、悲しみに打ちひしがれたときは、いつもテーブルの下にもぐりこんで、子犬の背中に疲れた頭をこすり付けました。そんなとき、子犬は子供にとっても同情的でした。こんなときに、子供が子犬が素直に受け入れられないようなひどい仕打ちするとは誰も思わないでしょうね。

子犬は家族の他のメンバーとは親しく交わることは決してありませんでした。子犬は子供以外のメンバーを信用していませんでした。子犬は彼らが近づくと、恐ろしい表情をするのでした。だから、彼らも当然子犬が好きになれませんでした。

家族のメンバーは子犬に食べ物を与えなかったり、いじめたりして喜んでいました。一方、子犬は成長するにつれて、かなり注意深く何事も見ることができるようになっていきました。子供がうっかりしているときは、子犬の思い通りになることもしばしばあったのです。そうです、子犬も成長していたのです。

子犬は、一計を案じて、大きな吠え声を差し控えるようになりました。子犬は犬用の小さな毛布を巧みに利用した

のでした。その結果、子犬はそれから後は夜になつても闇雲に吠えることはなくなりました。

でも、時々、子犬は眠っているとき驚いて吠え出すことがあります。しかし、それは夢の中で大きな、目つきの悪い犬に出くわして、びっくりしたからでした。

子犬の子供への忠誠心はますます強くなりました。そうして今では崇高なまでに高まつていました。子犬は子供が近づくと、彼の目の前で尻尾を振りました。子犬は子供がいなくなるるとても悲しい気持ちになりました。

子犬は近所のいろいろな物音からも子供の子音を聞き分けることができました。その足音は、子供の子犬に対する呼びかけでもあったのです。

子供と子犬の友情関係は、専制支配者の子供によって統治されている一つの王国でした。しかし被支配者である子犬の心には子供に対する非難や反逆心は少しもありませんでした。この子犬の小さな心の内部の神秘的で秘めやかな原野には、愛と忠誠と相互信頼の花が咲き誇っていたのでした。

子供はいろんなことに興味を持っていたので、周囲の不思議なこと、珍しいことを好んで観察したり人々に聞いたりしました。こんなときは子犬がいつも従つてついて行きました。

そのときお父さんは子犬がいることに気がつきました。

お父さんはわめき声を上げると、とても重いコーヒーポットで子犬を叩きのめしました。子犬は突然わけもなく叩かれて、恐怖の悲鳴を上げました。子犬はお父さんの足元でもがきながらどこかに身を隠そうとしました。お父さんは重い足取りでふらふらしていました。そのために子犬はようやく身をかわすことができたのでした。

お父さんは足元にいる子犬をまたコーヒーポットで殴りつけました。すると子供が、あたかも騎士にでもなつたかのように大声を上げて勇敢に飛び出してきました。お父さんは子供の叫びに気がつきませんでした。お父さんは何か訳の分からないことを喚きながら子犬に向かって突進しました。

子犬は矢継ぎ早に二回も叩きつけられたので、逃げる望みを捨ててしまいました。子犬は寝返りをして背中を上に向けてると、子犬独特のやり方で足を上につんとあげました。同時に目と耳を使って悲しげに哀願しました。しかしお父さんは荒れ狂つていて、突然子犬を窓から放り投げようという衝動に駆られたのです。

お父さんはもがいている子犬の足を挿んで高く持ち上げました。お父さんは二、三度もあそぶように子犬の首をうちぶりました。そうして狙いを定めて窓の外に投げ捨ててしまいました。

でも、子犬が先頭に歩いて行つたに違いありません。そのために、子供があとからきていることを確認するために十五分毎に子犬は後戻りをしなければなりません。子犬はこのような外出についていつもすばらしいアイデアを持つていました。子犬はそんな素振りでも万時振舞いしました。子犬はすばらしい支配者の家来であることに誇りを持つていたのでした。

ある日、子供のお父さんがひどく酔っ払って帰ってきました。お父さんは帰ってくるや否や料理器具や家具などに加え、奥さんまで連れ出して大騒ぎをしました。

そんな騒ぎの最中に、子供が子犬をつれて部屋に入ってきました。子供と子犬は野外探検から戻ってきたのでした。子供はお父さんの状態を見てすぐにすべてを理解しました。子供は素早くテーブルの下に潜り込みました。彼は今までの経験からそこが一番安全であることを知っていたのです。子犬はどうしているのか理解できなかったのです。子犬はいぶかしげな目で子供がテーブルの下にもぐりこむのを見ていました。子犬は面白いゲームだと勘違いしていたのです。子犬は子供と遊ぶために彼の傍に行こうとしました。その子犬の行動は友人のところに行こうとしている犬と全く同じでした。

アパートの人々は放り投げられた子犬を見てびっくりしました。反対側の窓辺で植木鉢に水をやっていた女性は思わず悲鳴を上げて植木鉢を落としてしまいました。隣の窓辺にいた男性は危なっかしいほど身を乗り出して飛んでいく子犬を目で追いました。

庭で洗濯物を干していた女性は驚いて飛び上がりました。彼女は口いっぱいに洗濯鉄をくわえたまま、異常事態を説明するかのようには手を盛んに振っていました。彼女の様相は猿轡をはめられた囚人のようでした。

子供たちが大声を上げて走って行きました。放り投げられた子犬の体は下のほうの五階にある小屋の屋根にどしんと叩きつけられました。そうしてそれから路地に転がり落ちていきました。

はるか上方の部屋にいた子供は、葬送曲にも似た長い叫び声を上げました。そうしてふらふらと部屋を出て行きました。

子供は長い時間をかけてようやく子犬が転がっている路地にやってきました。子供はまだ小さかったので、両手で上の階段をしっかりとつかまえて一步一步降りて行かなければならなかったのです。

人々が子供を迎えに来て見ると、子供は無二の友人であった暗褐色の死体の傍に呆然と座っていました。(完)